

# 平和への道

去る5月12～13日、韓国のソウルで開かれた第3回ロータリー・アジア親善会議で、藏並RI理事が、基調講演を行い、参加者に多大の感銘を与えました。以下に同講演の要旨を掲載します——『友』編集部

第3回ロータリー・アジア親善会議での基調講演の要旨

RI理事  
藏並定男

この度の湾岸戦争に際して、パウロ V. C. コスタRI会長（当時）はロビンソン事務総長と連名で「世界平和へのロータリーの誓約」を全世界のロータリアンに送り、この戦争が「掛け替えのない人命を犠牲にし、人間社会の向上にとって貴重な資源や資材の喪失を招く事態の発生を悲しみ、遺憾の意」を表明しました。幸いにして、この不幸なる湾岸戦争は短期間で終了しましたが、全人類のために人道的奉仕の実践を目的とする非政治的組織団体である国際ロータリーが、戦中、戦後を通じてロータリアン個人として、世界中の国々が平和な中に共存できるよう、最善の努力をすべきことを要請したことは誠に時宜を得た表明と存ずる次第です。

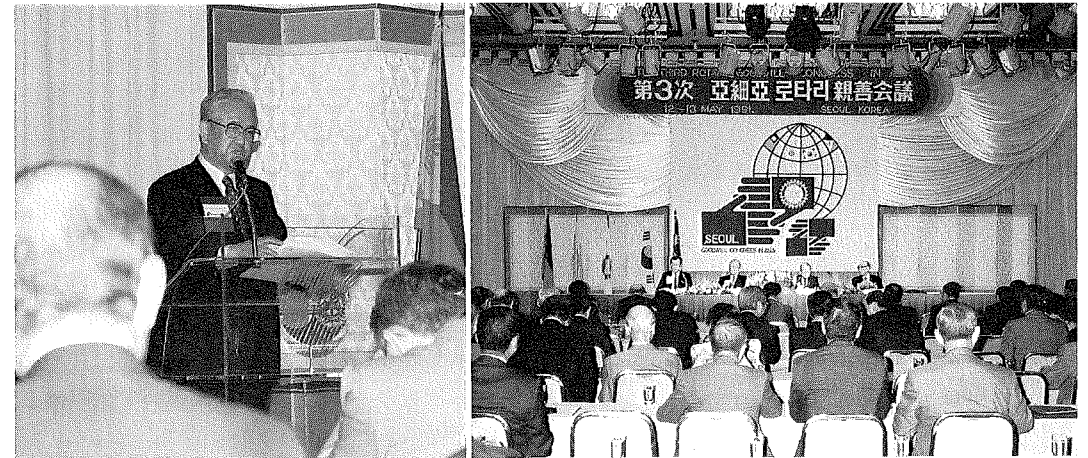
## 「世界の戦乱の中のロータリー」

私はこの誓約を読んで、かつてヨーロッパで戦争が起こり、第2次世界大戦の発端となった1939年に国際ロータリーが発表した「世界の戦乱の中のロータリー」を思い浮かべるのであります。その声明の内容は、次の通りでございます。「ロータリアンに対して、各自の所属する国の国民としての義務について指図することは国際ロータリーの権限外のことである。しかしながら、今日の激動の時に当たり理事会は全世界のロータリアンに対して次のことを改めて強調する必要があると考える。それは、ロータリーは奉仕の理想に基礎を置くがゆえに、自由、正義、真実、誓約の尊厳および人権尊重の存在

しないところにはロータリーは生存することもできないし、その理想を普及することもできない。ロータリーにとって不可欠のこれらの原則は国際間の平和と秩序を維持するためにも肝要であり、人類の進歩にとっても肝要である。従って理事会は、これらの原則に対して加えられるあらゆる攻撃を非難し、各ロータリアンに対して、ロータリアンはこれらの原則を擁護し、国際間の紛争を解決する手段として、戦争に訴える必要のなくなる日の1日も早く招来するようその力を注ぐことを要請する」。そして最後に「全世界のロータリアンに対して、彼ら自らはもちろん、彼らの居住する地域社会の人々とも語り、迫害と復しゅうに汚されない戦後の世界再建計画を打ち立てるため、各々その分を尽くす心構えを持つべきことを、ここに強く要請する」という強い決意を表明したのであります。

この声明にある通り、ロータリーは個人の自由、思想、言論および集会の自由、信教の自由の存在しない国々には存在を認めておりませんでした。これはロータリーの掲げる奉仕哲学より考えて当然ではありますが、世界の平和を究極の理想とするロータリーにとっては、果たしてこのままで世界平和の達成は可能か…という心配はどなたも持っていたのではないかと思います。

ところが1987—88年度チャールズ・ケラーRI会長は、RIの方針に合致することを条件と



基調講演を行う藏並RI理事

第3回ロータリー・アジア親善会議のシーン 大橋章一PG撮影

して、いまだロータリークラブの結成されていない国々の個人や団体との非公式な接触を奨励し、国際理解と世界平和への模索を始めたのであります。さらにケラー会長は第3回理事会において、以前ロータリーが存在していた中国への拡大調査を承認したのであります。また、中華人民共和国内でロータリー財団のポリオ・プラスや奨学金、GSEプログラムを実施できるや否やを調査することを事務総長に指示しております。

## 世界は変わる

さらに、1988—89年度に至りロイス・アビー会長は、ソビエト連邦の、初めてのGSEチーム6人の専門職業人が英国を2週間訪問し、翌年には英国からソビエトを訪れることを発表しました。また、オーストリアおよびポーランドとのGSEプログラムも行われていることを発表しました。1988—89年度には、ハンガリーのブタペストに、ポーランドのワルシャワにロータリークラブができ、50年ぶりに東欧にロータリークラブが復帰した画期的な年であります。その上、女性のロータリークラブ入会も認められた、という記憶すべき年となったのであります。その後ドイツの東西の壁も撤去され、ソ連のモスクワにロータリークラブが誕生するなど私たちが驚かしたのであります。

ロイス・アビー会長は、「自由諸国だけの平和でなく、真の世界平和を目指すために、ロー

タリーのない国あるいはかつてロータリーの存在した国にロータリーを拡大する必要性を説きまた共産圏諸国との関係改善と友好関係樹立のために努力すべきだ」と言っております。

ポール・ハリスは「この世は常に変遷する。われわれは変遷する世界とともに変遷する用意がなければならない。ロータリーの物語は、幾度も幾度も書き換えられなければならないであろう」と言っています。ここ数年間のロータリーの変貌ぶりには目を見張るものがあります。ロータリーは創立以来86年、ひたすらに世界の平和を追究してきました。今やまさにその第1歩を踏み出したといえます。

そのためにも、アジア親善会議は今後ますます活発に開催され、親睦を通して平和への模索を続ける必要があらうかと考えます。難しい困難なことではありますが、ロータリーの終局の目標が世界の平和である以上、この問題を素どおりしていくわけにはいかないのであります。私は、私たちの考え方がただ1つにまとまろうとは決して思っておりません。私は、ロータリーの理想を追究する世界各地のロータリアンが、自分だけの社会的、経済的あるいは政治的見解を、ほかの国のロータリアンに押しつけるようなことはないと思っております。私は、ある人々が彼らのシステムを他人に押しつけることができると考えたからこそ、今日まで戦争が後を絶たなかったのだと思っております。ロータリーについての考え方は、単純にして明快であらねばならぬと思えます。すなわち、ロータ

リーは、「人は友だちを必要とする。そして親睦と善意を、あらゆる価値判断の基準とすべきである。将来の平和構想が成功を収めるためには、世界中の国家は、例え一国としていかに強大であろうとも、すべて友だちを必要とする」…という事実の上に築かれねばならないと考えています。

1959—60年度R I会長ハロルド T. トーマスさんは、国際奉仕におけるロータリアンの心構えについて、次のように言っています。すなわち、

第1に、愛国心はすべての人間に共通な感情であり、間違っていない。しかしこの愛国心を乗り越えてその先を見ているだろうか、そして自分を世界の市民として見ているだろうか。

第2に、私たちは少しでも国家的ないしは人種的優越感をもってものを考えようとしていないか。

第3に、私たちは他国の人たちとの間に共通の立場を探して合意に達しようと、真剣に努めているだろうか。

第4に、私たちは地球上の平和というものは、善意の人々の上にもたらされるものかどうかを信じているだろうか。

これは、1947年、戦後まもなくオークランド・ロータリークラブでのトーマスさんの卓話ですが、今日改めてかみしめてみる価値がある言葉だと思います。

#### 民際、人際交流を

さて、最近「国際化」ということが問題になっております。国際化は英語では、Internationalization といいますが、そこには national という1語が入っております。しかし国際化を押し進めていけば国家を超えようとする考え方こそが眼目となるのではないのでしょうか。国際化とは、「固有の同一性をもった1国民ないし1民族を、最も摩擦の少ない形で、国際的に定位させるための努力」であると定義されております。現在、世界は近くなったと申されます。一面の真実ではありますが、他面では正しいとは思われません。映像や交通通信の関係で物理的

な距離の短縮だけでは、世界は近くなったとは申せません。世界を本当に近づけるのは、「知性」であり、「善意」であり、「友好」であります。この3つを世界的視点から行動に移し得るものはロータリー以外に見当たらないと思います。パウロ・コスタ1990—91年度R I会長が「世界平和へのロータリーの誓約」を全世界のロータリアンに訴えたのも、ロータリーこそ恒久的世界平和達成のための必要不可欠からざる、かつ最も効果的な組織であるという信念に基づいたものと信じています。確かに道は険しく、時間のかかる事業であります。しかし、私たちはこの目標に向かって前進するのみであります。

ロータリーでは、国際交流ということを感じに奨励しております。私はこの国際交流が民間交流となり、さらに人際交流という国家を超えた交流にまで発展していけば、戦争という不信と疑惑あるいは嫉妬からくる争いは次第に姿を消していくのではないかと期待しております。この意味でも、サブ・次期R I会長（当時）のテーマである“Look Beyond Yourself”は現在のロータリーの在り方を訴えた奥深いテーマだと思えます。

国際化とは、覚めた自己認識ないし自己省察をふまえたある種の謙虚な精神に基づかない限りうまくいくはずがありません。傲慢な国際化などあり得るわけがありません。私たちロータリアンが常に心掛けている「寛容の精神」こそ、知性と教養に裏打ちされた善意と友好による国際化による世界平和への道であると信じています。

このアジア親善会議は、私たちアジアのロータリアンが善意と友好を求め探す絶好の機会であります。21世紀はアジアの時代といわれております。アジアの平和は世界の平和に通じるという、夢と希望の新世紀が今や始まろうとしております。私たちの責任は誠に重大であります。アジアを代表する素晴らしいロータリアンが、このようにして集まった親善会議は、必ずや実り多い成果を生むものと信じております。

(1991年5月13日ソウルにおいて)